

獨吟聯句 昌谷詩 (一)

辛賀の長篇「昌谷詩」と「惄公」が、独吟聯句であることを、わたしは一九五六年「歸鄉」(「方向」六)でいった。そのうち、鈴木虎雄・素慈奇・斎藤聰・陳弘治の諸氏の注解が出、ちかごろ、草森紳一「垂柳の客 李長吉評伝」が「現代詩手帖」に連載中である。これらはいずれも両詩あるいは一方に触れ、特色をもち新鋭の説をなすが、両詩を独吟聯句とみない点では旧注を踏襲する。

人と異なる説を出した以上は、その根拠を示し、両詩が聯句としていかに展開するかを解き明かす責任がある。一九七〇年「惄公」(「人文論叢」第一八号)を書いて、その半ばを累した。「昌谷詩」については、「帰郷」でもややくわしく述べたが、そこで重魚を善愈・孟郊の聯句との関連において、いま、この詩の独吟聯句としての展相を解きほぐしていくことにする。

「昌谷詩」という題は、わたしの見たかぎりの本に異同はない。北宋本など多くの本は、題の下に小文字で「五月二十七日作」と注する。金刊本は、この注が題と同じ大文字で、題にただちにつづく。だがその全体が題ともどれないことはない。朝鮮本にはこの注がなく、王注は「異本

・姚經三の本に「(1)註なし」と記す。

注のあるのがよこ。これは李賀の自注にちがいない。やうしてこの自注は、單に製作の時期を示すだけではなく、動機や意図をも暗示する重要なものだと推測する。その根柢は、第一句を読みとけ提出できるだふう。

独吟聯句は、作者が假設した二者がかわす対話を虚構する。「端公」においては、「宋玉」と「姚」だった。「昌谷詩」では、「李賀」と「巴童」である。

「李賀」は、作者李賀が「昌谷詩」という舞台上に登場させるために作り出した人物で、作者の李賀そのものではない。賀が対象化した自己、といえなきことはないが、それだけではなく、故意に変形しているところがあるように戯じらせる。しかも作者の李賀は、隨處に「李賀」の中にい、たり、出たりし、対象化した自己をどこにほりこんだり取り出ししたりしているようである。『巴童』と『巴童』、『昌谷』と『昌谷』との關係にも、同じからくりが仕込んであり、それらの間の混雜紛亂を、作者の李賀は甚だ楽しんでいる氣味である。つたしの注解はしばしば迷路に放浪して読者を途方にへれさせる失禮を犯しあせめかと恐れるが、かたの迷魂をあへたのには、どの仕掛けた船穿に落ちてしまふほかはないわけだ、真想をだう。

巴童は賀の侍童で炎僕を兼ねる者である。眞口「昌谷にて賦書し、巴童に示す」詩に

萬葉通光薄
萬葉深諺濃

虫すだき 灯火 うすく
真冷えて 句ふ 想案

尾羽枯りす われを 憐れみ

苦しみて なほ せかよ

病弱のたのてに仕えて 素を煮などするかに感謝し、やれに答えたかての「日暮ゆら」

萬葉通光薄
萬葉深諺濃

虫すだき 灯火 うすく
真冷えて 句ふ 想案

尾羽枯りす われを 憐れみ

苦しみて なほ せかよ

病弱のたのてに仕えて 素を煮などするかに感謝し、やれに答えたかての「日暮ゆら」

二

田島直山稿

大きな 野良着に命ひて
秀でし 雷 苦めしまふ

非題唱樂府

きみ 禁句に 歌ふならわば

誰か讀ひむ 秋のあじれを

この詩に仕立てやっていり。

「一二」少し横道にそれるが「垂劍の者」について説明しておきだ。一二の題は、歌出手が捕獲したように、後漢の光武帝が將軍馬援をたたえた言葉にちなむ。

『後漢書』卷十七の伝によれば、馮驥は字は公孫、順川父城の人で、読書を好み、丘氏春秋などの兵法に通じた。王莽朝の末年、光武帝に歸属し、あるとき、辻を上げまし、帝のひも、いの軍隊が飢寒に苦しんだとき、豆粥や熱火をそなえた。当時の反乱軍のうち強大な勢力をもつ赤眉の賊と戦しだとき、同僚の將軍が功をあげすぎたことから大敗し、馮驥も馬を棄て走りで回旋

3123(20768)

阪に逃れたが、兵をたて直し、電池の崎底で賊を大破し男女八万を降し、の二りの十万も宜陽に逃げた。そこで帝は聖書をあたえ馮異をねぎうつた。その文にいう「赤眉の破れ乎ゞしは、士吏の労苦による。始めは翅を回輪に垂れしかど、終に能く翼を電池に奮えり。これを東隅に失い、これを桑榆^{さくゆ}に收めたり」というべし」

ところで、回紹は魯の章懷太子の注に「今の洛州永寧県の東北に在リ」とい、清の王先謙の集解に「崎底は永寧県の西北七十里に在リ」という。それらけいすれも賀の家居の地昌谷に近い。馮異の本籍の颍川もまたそう遠くない。賀の詩の題の「詠書」の字面は馮の伝を意識してのことであり、その時よんでいたものは当のその伝であつたような気がする。賀はおのれを馮異にたぐえかけたが、いや、おれは皇帝の子孫、そこでおれが光武ならお前はさしずめ馮異さ、と大きく出、それにしても貧弱でひよろひよろの光武だな、やつぱり翅を垂らしたお方というところか、しかしあ前が辛苦しておれに仕えてくれると二ノは、どうしても馮異だよ。といつたのが、巴童に示した作であろう。それに對して巴童が、このごつい団子鼻を馮さんとは、それがどんな方やらよく知りませんが、お氣の事。わたしには野良着が似合い。將軍になる気なんぞありません。あなたさまの立派な眉は光武帝そつくりなのでしようが、皇帝なんぞにおなりになるより、そうして苦しみながらも詩をおつくりになるほうが立派でござりますよ。なにしろあなたさまの詩のおかげで、人々も秋のあわれに気づくのでございますから。と答えたのを胸つかれて感動して、賀がこれを詩として保存してやったのではないか。

李商隱の「李賀小伝」に、賀は「恒に小奚奴を従がえ、疲蹕に騎り、一古錦囊を背にし」と、まよひ歩いたといふ。小奚奴とは少年の奚族の下僕といふことだらう。奚族について付『隋書』卷八十四の奚の伝に、「奚はもと庫莫奚といふ。東部の胡の種なり。慕容氏に破られ、遷落する者松漠の間に竄匿す。その俗はなほだ不潔となる。しかれども射獵を善くし好んで寇鈔をする」といふ。『周書』卷四十九に「鮮卑の別種」といふ。『旧唐書』卷八十九下に「風俗は突厥に並ぶ」という。匈奴の別種といふ説もある。要するに、鮮卑中の少数民族で、山谷僻地に散居したが、大族に圧迫され隸屬していくものらしい。「その俗はなほだ不潔」とか「好んで寇鈔をする」はいまでも、いわゆる先進国がいわゆる後進国を批評することばとそっくりだが、唐代には士人の家庭でしだしば奚人が下僕に使用された。皇帝が鮮卑とばかりの深いことがその一因であろう。なおこれは臆測にすぎないが「奚」はあるいは「溪」ではないかとの疑いもある。大江上流の巴の國に溪族といふ少数民族があり、賀が「嶮公」に「壳革問巴實」といふ巴實はその族であるとして、余談ながら陳寅恪の説では、陶淵明もその族の出身であろう、という。巴童といつたければ有名詞といつより、巴の國の子、といったよび名らしい感じがする。その族の人々が剽勇で歌舞を好んだことは拙稿「嶮公」にのべた。

唐代の士人曰く、みずから孤独だといふよりも、青童下僕を伴つてゐるのが例だ。ただ階級の区別が厳密で、主人と僕者が話しあうようなことはあまりない。王維の「鄭州に宿る」詩に「他鄉に傭侶を絶ち、孤客は童僕と親しめり」といふのも、そのような平生の主客が、孤独な旅の中で

親愛を覚えはじめる面白さをうたっているのだ。

侍童と下僕を区別し、下僕が主人の書齋に次うへんを取る人もいるが、豊かな士人ならともかく、李賀の場合は、巴童が侍童でもあり、下僕でもあつたよう。轄愈の「秋情詩十一首」の第八首に、

童子はも外よりいたり
わがまへの灯あかりとぼしめ
われに問へどわれは應こゝへす
夕餐ゆふおくにわれ食くはわば
へやのすみに退き坐り
うた幾いく読みもてけきぬ

童子自外至
吹燈當我前
問我我不應
請我我不餐
退坐西壁下

(779)

どうたうのは、侍童が主人の書齋に常居した一例であろう。巴童はたぶん、影の形にぞうめうに書齋に、齋中にも戸外に従つたであろう。そして李賀は、陶淵明が形と影と精神とを対話させたように、「李賀」と「巴童」とに対話させ、その間にあのれの精神を出入りさせたのが「昌谷詩」であるように、わたしには思われる。

「昌谷詩」は四十九韻九十八句から成り、偶数句の末字に押韻する。韻字は上声の紙・西・止によって代表される讀の文字と、去声の真・至・志・未で代表される讀の文字が、使用される。

紙・旨・止の三つは通用が許され、眞・至・志の三つもまた同様である。第五十四句の「責」字は未讃の文字で、眞・至・志に属する文字との通用は許されないが、しかし近似讃だから、自ら許して使つたのだろう。(二)では、上声の讃字には△印、去声の讃字には○印をつけて、区別しておく。

— 嵐谷五月稻 嵐谷の五月の稻は

四

五月二十七日。それはおやうく、李賀が奉礼郎の職を辞して嵐谷に帰った元和八年ハニミである。朝食をすますと、李賀は驥馬にのり、巴童をつれて、ふらりと家を出た。真夏で汗あつても朝の日かけは涼しく、きょううは、賀は機嫌がいい。主人の憂鬱に慣れている巴童でも、やはりその明るい顔は、かれを浮きうきさせんだろう。驥馬の後になつたり前になつたりしてちょこちよこ走っているがれが、「嵐谷の五月の稻は」と節をつけて歌うようにいった。「あやあや」とそれを聞き、とめた賀が、巴童に語りかけた。

お前も、しゃれたことをいうじゃないか。そいつはわたしの詩興をそそる。いまは五月に違いない。だが、ひねくれた詩人は、五月を詠するとき、「五月のしなどと素直には歌い出さないものだ。しかし孔子は「詩三百、一言もってこれを蔽えば、いわく、悪い邪しま無し」といった。

あの圓く美しい音おとといふ、わたしはあまり好きではないが、時々いいこともいう。「思おもい邪あやしま無なきし」は『詩經』の「七月」だ。その幽風うとうの「七月」には「五月になると蟬が鳴く」とも「いなげ」が足を動かして「とも歌つて」いる。

もっとも、素直なばかりが詩でもない。裝飾のお化けのような文学にも、詩人は心をこめたのだ。六朝の詩文をいまの先生方は真まみそにいうが、あの頃堯の中にも流れる一種不可思議なナイーブを汲みとれずに、なんで『詩經』が理解できよう。

五月といえば、わたしは『文選』卷四十二の、魏の文帝、すなわち曹丕さうひが「朝歌の令の吳ご夷いに与えた手紙」の文句を思い出す。書か出しはこうだ。

「五月十八日、丕、季重きじゆうに白しらす、遙とがなきや」「季重とは異質の字ことぶだ。」「塗路ぬぢは局ちかしといえども、官守くわんしは限りあり」「官守くわんしある者もの、その職しょくを得とれば則そなへち去る」というのと同じ意いだ、と説明する。それなら、性に命めいわめ奉まつれ郎らうをお返もどしして、こうして故郷ふるさとに帰かって來きたわたしにびたりじやないか。お前まへには迷惑めいせきだろうが『文選』ついでにいえば、卷五十六・晉の潘岳はんがの「楊仲武の謡うた」には、「不幸にして短命たんめい、春秋二十九、元康九年夏五月己亥卒そくす、ああ哀かなしい哉哉」といつていて。この仲武、名は綱つな。昌谷しょうこくから、ほど遠くない崇陽宛陵じゅうようあんりょうの人ひとで、父ちちは東武侯公楊潭ようざん。母ははは鄭氏せいしといふから、わたしの母上おはなと同姓どうせいだ。当入門潘岳の夫人楊氏ようしの夫おとこ。おれにはそんなスマートな叔父おじはおらめが、妹いもによれば、姻族いんぞくは隆盛りゆうせいなのに、仲武は孤独こどくで貧ひんき、しかしつつましく陋巷ろうきょうに住すみ、

清才萬茂だったという。わたしに似なくもないのではないか。なに、そうでございましたか、だと。冷やかすな。どうせ喻えだ。何から何まで同じとはいかぬさ。それに、わたしだって、正人君子を前にしてこんなことを言いはせめ。わたしの何もかもを知っているお前に卑下してみせる「こともいはぬじやないか。晋の「元康」と唐の「元和」とは意味も相近い。二十九歳にはまだ五六六年あるが、病身のわたしのことだ、来年の夏あたりに口ばっくりと……

妙な顔をするな。なるほど、変なことを言い出したので、またお前は心配してくれているのだな。今のは冗談だ。

魏の嵇康が編んだといわれる『高士伝』と「う本がある。いつかちょと読んでやつたら、気についたようだつたじやないか。あの中に出てくる人物で、被裘公と「う男がいる。いかめしそうな名前だが、ジャンパーを着たおっさんといふぐういの意味さ。もちろん、本名ではない。そのおっさん、呉の人で、あるとき延陵の季札という貴公子とばつたり出あつた。ちょうどその時道に金が落ちていた。季札があっさんをふりかえて「あの金を拾うがいい」といった。おっさん、鎌をほうり出し目をむいて、たんかをきつた。「お前さん、どんなおえうがたか知らんが、人を見さげるのもほどほどにするがいい。夏の五月に皮のジャンパーを着て薪を背負つてゐるからといって、おれは人の金をくすねるような男じやねえ」

わたしもお前も、山あるきのジャンパーにひつかけてるが、それくらいの心悪氣はあるわけだ。ところどころだね。その悪氣で、これからひとつ聯句でも巻一うじやないか。別にむづかしくは

ない。お前はわたしの言葉に合ひさせてしゃべればいいのさ。句の形は、わたしがどとのえてやる。さて、お前が初句をおいたのだから、次の二句をわたしがつくよ。

2

細青満平水 やえざと水の面に満てり

質

3

笠巣相霧墨

たたなづく蓬か山なみ

巴童がたずねる「先生はいつも、むつかしい本を読んで、むつかしい言葉をおなうべなさいましたが、この第二句は、またなんとやさしいことでしょう。わたしのまわをなさいましたか。それとも、故事でもあるのですか？」

わたしのまねをなさいましたか、はぐく出来た。なんの故事があるものか。田んぼに、あの、稻の穂のぎ、しり成っているところを「細くって青くって水の平面にいっぽいだ」と表現したのは、おそらくわたしが初めてだ。これも、お前の句のおかげだ。

だが強いていうなら『文選』卷四十三、趙至が「嵇茂齊に与えた手紙」に「認^{アコギ}めて遠く游する士は、身を無人の郷に託し、書を返^{スル}き路に捨る。……朝霞の暉^{ヒカリ}を咎^{ムカシ}けば、身は遄^{ツバメ}征^{スル}くに疲れ、太陽の暉^{ヒカリ}を戯^{ハラフ}むれば、夕^{ハシモ}す場^{ハシモ}に効^{ハシモ}る。目を半^{ハモ}け^キ、懶^{ハモ}れる方に肆^{ハシモ}てば、則ち遼廓^{ハシモ}かに覗^{ハシモ}るなく、眞^{ハシモ}を眞^{ハシモ}原^{ハシモ}に極^{ハシモ}むれば、則ち漫寂^{ハシモ}くして間^{ハシモ}くなし」の肆目平韻あたりを點化したと見てもうつても、別に文句はいわぬつもりだが、わたしけ、お前の裸の目が見出すもののほうを、信用したい。

巴童「では、第三句も先生の独創ですか。遠くのまるまっかい山が、おしゃいへしやい、二つ
ちへや、てくるみたいだな」

いいねえ、お前のようにわたしの句を読んでくれたら、作者、大いに張りあいが出てくるとい
うものだ。

わたしたちはいま、山にむかって歩いて歩いている。あるいはやっていると思つていて、しかしそれ
は相対的なもので、もしわたしたちの現在が運動の中にはないとすれば、静止の裡にあると思つて
人でいる遙かな山がこちらにやってくることになる。わたしたちの動いている目を不動として凝
視すれば、非情も有情となり、死者もよみがえる。

昌谷の五月の稻は、生命の夏の現実だ。邪しまなき思いが澄んだ目で見た物のすがただ。そよ
ぐ稻を、細いとし、青いとするのも、邪しまのない目か。わたしはそう信じたい。だが、細いと
は、細くないものとの關係において細いとされるのであり、青いとは、青くないものとの対応に
おいて青いとされるのだ。細く青いと表現するとき、その他のものから細く青いものを幾んだわ
たしの傾向、わたしの態度、わたしの批評がそこには反映していないとはいえめ。傾向、態度、批
評、やうしたもののが加わったものも、なお思ひ邪しまなしと言つるか。思い邪しまなき詩経に
も、変風・变雅があつて、極めて傾向的、批評的であつた。孔子はそれをもふくめて詩三百とい
つたのだろう。孔子のことは、しかしあどうでもよい。邪しまなしの定義は孔子をかつぐ学者
どもにまかせておけばよい。それよりも大切なのは、稻の細青を凝視したとき、ぎりぎり茂つた

その細青が平らな水面に支えられているのを見たことだ。稻が満ちておれば、そこには口稻しか見えないはずだ。現にお前とわたしとが、家を出てから見てきたものは、稻だけだった。見なれた風景のなかの見なれた稻は、それを網膜に写しながら、意識しなかった。「畠谷の五月の稻」。とお前がいってとき、ふいにその稻が意味を帯びた。意味を帯びた稻は、わたしの目をさそった。目につられてわたしの体がかたむいたとき、細く青いものの間に平らな水を見た。いや、平らな水を見たので、そこからつき出ているものを、とつさに、細く青いものと感じたのかもしれない。わたしの意識が平らな水にぶつかったとき、満ちているのは、もはや細く青いものではなく、平らな水面であった。

水面は鏡だった。ぎっしりしげつた細青の間の小さな水面を鏡というのが大きさだといつか。だがそれは凝視することを知らぬ人のいうことだ。手仕事の中で物を見出していく人なら、油壺の中に銀河を、齋いた矢尻におのれの姿を見るのも不思議ではない。

お前がふり仰いで遙かに見たまるい山を、同時にわたしはうつむいて水鏡に見た。反対の方向に分散した視線がどうえた山は、その山がおし合いかぐらかなるよう、この第三句の中でかきなつている。人は鏡面を境にして、現実から夢幻に入り、夢幻から現実に出る。お前の現実とわたしの夢幻とが、平水の鏡面でたわむれ、これから、夢にも現にもへだたりなくすぐまたげなく自在に遊べるわけだ。お前の夢幻がまことに現実なのか、わたしの現実はまことに夢幻なのか。そんなせんたく世の多忙なひま人にまかせて、わたしたちは無用の多忙な遊びにあそぼう。

二〇世纪の李贄 (II)

書
述

きょう大学の図書室で、増田涉『魯迅の印象』を棚から取り出し、なんの気なしに開いたら、「彼は昔いとや、『李贄の書を好んだ』と細いていた」という句が飛びこんだ。借り出して読みはじめると面白く、一氣に読みおこった。やうでやうに、魯迅の死んだ日の十月十九日であったことに、気づいた。雖然のノンにすがりながら、その眞然が、きょうのわたしにかづなつてやつてきたばかりを紀念してノン一文をしたためたものである。

「魯迅の印象」は昭和四十五年五月刊。序によれば昭和二十三年秋講談社から出た同じ題の本から数篇を加除してできだとのこと。一九二九年分どういは雑誌などで読んだ記憶がある。李贄に関するものはじめてだ。

魯迅が李贄を好んだといつて、たぶんまだ李贄の著作人の立場で讀んだような気がする。荒井注は李贄の爱好者を列挙した最後に次のようにいつる。

もう一人は魯迅(1881~1936)、淡泊な隨筆家と考えられていて、陶淵明(365~427)の複雑な性格を再発見した魯迅——「文化戰線にあって、最も勇敢、最も頑強、最も張張、最も熱情ある前

の民族英雄であった」とモズ東は激賞し、いまや中国における文学の神である、その魯迅が譁嗣同と同じく、李賀をも愛したのは偶然なのだろうか。「——多くの作家中、予オ（魯迅）のあざな——荒井（）が好んだのはアンドレエフであった。ことによれば「これは李長吉を凌ぐ」と少し關係があつたかもしれない。」（周作人「魯迅に聞しての二」松枝茂夫訳「瓜豆集」[1940・創元社]所收）

わたしは『瓜豆集』の「一の文章はたしかに読んでいるが、記憶の中での李賀と魯迅を結びつけた周氏の文は、「——とは違つた気がする。しかし、では何だったかは思い出せない。ついでに荒井注の文をもう少しぬいておく。

李賀自身は非行動的な一詩人であったが、その作品にはかえつて、行動を拒否されて深く沈下せざるを得なかつた潛勢力がみなぎつている。やすがに魯迅はそれを見抜いていた。「仙才・李太白（李白は李賀のあざな）がよく豪語するのに、言うまでもない。爪は長くのび、骨骼はやせて枯れ木のような李長吉（）であつて、「見に若耶溪水の劍を賣う。明朝は歸り去つて猿公に事えん」（「南園」其の七）」と言いはじめる始末、全く少しも身のほどを知らず、刺客になろうと願つてゐるのだ。これはよくよく刺引きしなくてはならない、その証拠にはかれは實際は決して「刺客になりに行つていないのでから」（「准風月談」所收「豪語的折扣」）例によつて皮肉な発想ではあるが、かれが指摘する通り、李賀は確かに「利害にならう」と志したことがあるのだ。かれの非行動は単なる無氣力そのものではなく、かれが心

血を注いだ作品には、各時代の反逆者・憂國の志士たちを引きつけるだけのエネルギーが隠されていたのだ。そのエネルギーは恐らく革命的エネルギーに転化し得る可能性をすらはらむものであった。（章炳麟と魯迅の、陶淵明と李賀への偏倒は、そうとしか解釈できない）初期のニヒリスト魯迅が後期の革命文學者に変貌したように、完全な唯美主義者として出發した詩人の聞一多（1899-1946）が右翼のテロリストの銃弾に倒れる劇的な最後をとげたように、中國の文學者に共通する矛盾は「鬼才」李賀の内部にもまた存在していた。

これは乍らなか鋭い指摘である。初期の魯迅がニヒリストであったかどうか、後期への推移が變貌であったがどうか、したがってそれが矛盾であるかどうか、などに問題はあるにしても。

『魯迅の印象』にかえり 76-79ページの文章を、わたしの考えに従つて抜く。

彼は昔いどきは李賀の詩を好んだと言つていた。私はここに魯迅の文學を解く一つのカギがありはしないかと思う。自分はスタイルストだといふ彼の言葉も、李賀を好んだといふ彼であることを知ると何か思いあたるよう考へられないだろうか。また彼の文章——表現の方法のなかに李賀的な文學とつながるものが考へられはしないか。濃烈な感情のなかにも陰暗の色をたたえた、やや奇聳な美しさ——もちろん、李賀がそのまま現代の彼に移つてくるというのではないが、彼の李賀を好んだという性情そのものが問題だと思う。

佐藤春夫がいつか魯迅を杜甫に比したことがある。私はそのことを彼への手紙のなかで述べたことがある。すると彼は、杜甫なら悪くないと返事のなかに書いていた。それだけ軽い気持

ちでそういっただけだと思うが、彼は晩年になるに従つてしだいに杜甫的になつたと私は思う。李賀から杜甫へ——彼は変わつていつた。

だが変わつたかどうか、ほんとうのことはそれほどハッキリしたものとは言えぬかもしれない。もし変わつたとしても、それは二十七歳で死んだ李賀の表現の奇^キや文字の偏僻な使い方が、彼には年とともに、次第に身に添わなものになつたというだけで、主として年齢や経験の關係から、もう少しありやすく幅広く、杜甫的にその悲愴や慷慨を吐露するようになつたというだけのことかもしれない。

李賀について口私によくわからぬのだが、李賀の詩を箇注した陳本礼の『漫記』などをみると「幕落鬱憤した不平の氣」を写したもので「懷激痛心」に出たものが多く、「当時に感切して目撃し傷した」ことを、明らかに國政をあげつらうことができないため、「すべて尋常の詠物写景に託し、人をして容易にその意旨のあるところをうかがわしめなくしていろ」と見ている。姚文燮(姚文燮)、「漫記」に引く)はまた李賀の「命意・命題はみな深く當世の弊を刺したもので、切實にその隨筆のところに突きあたつてゐる」としている。これは普通にいわれている李賀とけまるでちがつた見方だが、もしそのような見方が本当だとすると、會通が好んだといふことは理解される。そして會通のそいつた態度は終生変わらなかつたし、二のような李賀から彼が抜け出したとは言えないから、変わつたといつても、その表現を中心とした問題である。

彼はまた苦いとき、ニイチエを好み、その素顔には常に「ツアラトウストラ」をおいていたといふ。……だが死ぬ三か月前に数年ぶりで訪ねたとき、彼の書斎には眞新しいハイネ全集の原書が並んでいた。……彼はそのままもうニイチエからハイネへとだいたいは変わつて行ったのであるまいか。……抽象的にいなれば、観念的な孤高から下りて、いつそう現実社会への接近を深めていたという二事ではあるまいか。それは李賀から杜甫への変わり方と同じ種類の変わり方ではあるまいか。

性情とか氣質とかいう彼の肉体が求めて飛びつかせるを得なかつた李賀であり、ニイチエであつたと思われる。それは晩年になるに従つて環境や経験の關係で、もつと濃い色彩として杜甫的なもの、ハイネ的なものが彼に出てくるようになつたけれども、しかしながら李賀とニイチエとは完全に抜け切つていなかつたと私は見たい——それほどそれらは彼自身の本采の性情や氣質に根ざしていたものだと思う。

この文章にわたしは一種の感動を覚えた。増田氏は、李賀についてはよくわかつない、と極めて謙遜し、保証をつけて論を進めているが、氏の論は蓋の本質をそれでいてないと、わたしは思う。氏の引く陳本礼の『漫記』は、『協律鈎元』の自序だが、あるいはかれに『漫記』という本があるのであろうか。陳本礼も姚文賓も、その注ではすいぶんこじつけをやる人で、うっかり感心できないが、増田氏の引くことは正しい。これとは「まるでちがつた」「普通にいわれている李賀」は、じつは李賀に対する無理解のあらわれにすぎないのでないのではないか。もっとも「普通にいわ